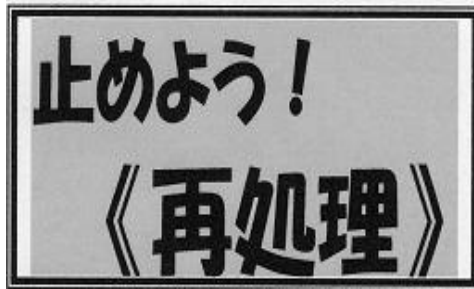


三陸の海を放射能から守る
岩手の会

ミニコミ通信 第19号

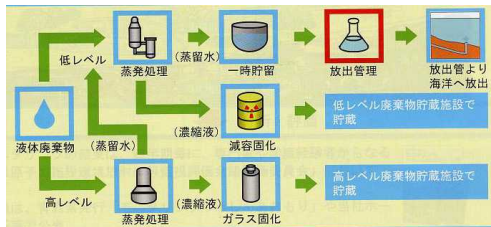
ホームページ(「通信」バックナンバー掲載中)
(岩手の環境/RI廃棄物/再処理)
郵便振替 02240-5-102650



2006(平成18)年
5月5日

編集事務局 S.Oshida
電話・ファックス
019-623-1636
転載・マスプリ・口コミ歓迎

ついに放射性廃液の海洋放出開始 原燃に抗議のハガキやメールを送ろう!



「廃液の工程図」 原燃配布パンフより

トリチウムを
含む廃液
原燃の発表によると、排水は燃料貯蔵プールで使われた水や、再処理のための硝酸溶液を再利用する際に出る廃液を蒸留し、放射性物質を除去したものと、除去しきれない放射性物質のトリチウムが約一億八千ベクレル含まれ

日本原燃(株)は四月二十八日、同日午前十一時頃から六時間にわたって、放射能廃液約六百トンを海洋放出したと発表しました。放出は二十四日の社長の定例記者会見や、二十五日の岩手沿岸市町村関係者の視察においても予告されず、放出後に公表されました。金曜日のために、放出時のモニター公表は連休明けになるなど、あまりに不誠実なやり方に怒りの声が上がっています。
「岩手の会」は即時、抗議文を送り、放出中止を申し入れました。各地から抗議の声を挙げましょ

ていたといえます。
今回放出されたトリチウムは水素と同じ性質を持ち、百二十年以上も弱いベータ線を出し続ける人工放射性物質で、海草や魚などを介して人体に取り込まれた場合染色体を傷つけるなどの悪影響が懸念される物質です。トリチウムを多く出す型の原燃周辺で新生児死亡率が増えたという事例も報告されています。

本格操業が始まると 二億トンの放出

原燃発表では、今回の排出トリチウムの量は「管理目標値の一億分の一程度」としていますが、逆に言えば、このまま 放出を許すならば、今回の一億倍のトリチウム排出が常態化する

取り返しのつかない海洋汚染に繋がります。

アクティブ試験は 五段階で実施、 より強い放射能へ

原燃の説明会で配布された「六ヶ所工場アクティブ試験のあらまし」といつパンフレットによると、アクティブ試験は第一ステップから第五ステップまであり、予定通り強行されれば、平成十九年にはフル稼働という計画です。

現在第一ステップが行われていますが、使用済み核燃料のうちの、低レベルで長期間、放射能を冷却保存したものの約三〇％から前処理剪(せん)断、溶解などの作業を始めた模様です。本格操業に入る前の今のうちに、一刻も早く再処理作業を中止させましょ

「海に放射能を捨てる な」原燃に「分キやメ ールを集中させよう」

三陸の海放射能を捨てることは絶対に反対です。有数の海産物生産県岩手として、「食の安心・安全」を求めて全国の消費者の皆さんと共にこの驚くべき事実を告発し、原燃に対

抗議先 日本原燃(株)

〒039-3200 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駱字沖付
4-108
TEL 0175-71-2002(広報) FAX 0175-71-2136

大阪の市民団体「美浜の会」が 原燃宛てメールを
仲介しています。

Eメール <http://www.jca.apc.org/mihama/>
ケイタイなら <http://www.jca.apc.org/mihama/i/i.htm>

する批判を広く巻き起こ
しましょう。事業者の日本
原燃(株)に抗議の「分キ
メール」電話、FAXを集中
させ全消費者の声で海を
守りましょ。

京大原子炉実験所から 三陸ワカメの放射能 測定結果到着

「豊かな三陸の海を守る
会」が田老海岸から採取し
て送ったワカメのガンマ線放
射能測定結果が返送され
てきました。
1キログラムあたり、セシ
ウムが0.2ベクレル、カリウ
ムが2000ベクレルなどで
正常な数値でした。

日本原燃 ついに認める 再処理工場は、経口急性致死量

四万七千人分の放射能を年間海洋放出

沿岸十市町村長らの工場視察説明会で

岩手県沿岸十市町村長、助役・課長ら二十八人による再処理工場視察が、四月二十五日なされ、児島伊佐美社長ら原燃幹部から説明を受けました。十八社に上る報道関係者が詰めかけ、「フットホールセンター」やモトリングポイント、PRセンターなどの視察や、質疑応答の模様を取材し報道しました。この視察のあとの四月二十八日、「豊かな三陸の海を守る会」の田村剛一会長、「三陸の海を放射能から守る若手の会」の永田文夫世話人ら八人が熊坂義裕宮古市長を訪ねて、視察の様子を聞く懇談会を持ちました。また、宮城県本吉町から請願代表者として視察に同行した「三陸の海を守る気仙沼 本吉の会」小野寺雅之世話人からも状況を聞きました。視察で明らかになったことをまとめると次のようになります。



仕組みは理解出来たが不安は消えない

視察後の質疑の中で熊坂市長は「再処理の仕組みについては理解できた。しかし、岩手の十五市町村連名の説明会要請について正式回答がなく、大変な憤りを感じている。海洋生物に対する影響は未知の世界であり、岩手県沖でも調査していた。これに対して、児島

社長は「正式な回答をしなかつた事は陳謝する。」と述べ、さらに「岩手県沖の調査は国が全国海域調査の中で行っている。原燃としては行う考えはない」と答えました。

岩手での説明会を再三要請

原燃による一方的な説明会だけでなく住民主催の「討論会」に参加することを、熊坂市長を始め三人の首長が要請し、「気仙沼 本吉の会」

小野寺世話人からも要請したにもかかわらず原燃側は言を左右にしておかず、たくなに感じようとはしませんでした。

風評被害の対策について多くの出席者から問われましたが、原燃側は「最悪の事故を想定しても一般人には被害が及ばない」と答え、首長らは納得せずくり返し説明を求める場面が続きました。

経口致死量四万七千人分の放射能を放出

計算上はそうなる

質疑は、「洗浄水もれ事故」や「海洋放出の時期」についてもなされましたが明確な回答はなかつたようです。「三億三千万リシーベルト、経口致死量四万七千人分の放射能が海へ放出されるのでは」との質問がありました。担当者は「計算上はそうなる。」と認める発言をし、「しかし多くはトリチウムで放射線量は極めて小さく、水と同化して薄まってしまふ」と付け加えました。(まとめ尚)

洗浄水もれ事故 深まる疑問 地下洞からも放射能

四月十一日の、猛毒のフルトニウムグラムを含む洗浄水漏れ事故について、原燃は、未だに詳しい顛末を公表していません。

原燃は、事故防止対策として閉止プラグに着色すると発表しました。しかし四月十八日に抗議に訪れた市民には着色はまだ、これからです」と回答し、青森県当局には「着色は既に行った」と報告しております。密閉されたセル内での遠隔操作ですが、のぞき窓のガラスは放射能を防ぐためにかなり厚く、手の代わりをする「マイクロレター」の操作も簡単ではなく、果たして着色など出来るものかという疑問の聲が上がっています。

更に、四月二十三日夕方には、「ソクリート製地下道」の配管受け皿から「ミッドレットあたり0.52ベクレルの濃度」の放射能が検出されました。公表は二十一時間後で、濃度のみの発表であり、全重量や核種も不明です。

「六ヶ所村ラフソデー」
六月十日(土)
盛岡 フラザあずて
十三時半 十七時半

前号で一部地域に、五月二十日、盛岡劇場にて」と報じましたが、その後の実行委員会において、「この日程では連休もあり準備が間に合わない」ので、六月十日に変更すると決定されました。訂正致します。

岩手県知事にも 要請八ガキを出そう

〒020-8570 盛岡市内丸10-1
拝啓増田寛也岩手県知事様

岩手県民にきちんと説明責任をはたすまでは放射能を海に放出しないよう日本原燃(株)と国に働きかけてください (例文)

差出人 住所・氏名

「三陸の海を放射能から守る岩手の会」は県民の命とくらしを守るために、岩手県が原燃と国に対して、放射能を流さないよう要請する、八ガキ投函運動を行っています。各地から大いに声をあげましょう。